身近にある大切なひと

小・6　陶山綾香

ある夜、私は暗い部屋で一人たくさん泣いていた。大つぶのなみだが
「ポトン、ポトン」
とどんどんあふれ出していく、そして、おばあちゃんの笑顔と思い出がたくさんうかんでいく。

私は、三年生のころにヘアードネーションのことを知った。おばあちゃんがガンになり治りょうをしていて、かみの毛がぬけていってしまったからだ。それで、おばあちゃんみたいな人の力になれることだからやりたいと思ったし、それが私に出来ることだったからだ。だから五年生の春に、それまでのばしていたかみの毛を短く切った。

その五年生の夏くらいまでは、おばあちゃんは在宅かい護で、病院に行く時以外は家にいた。在宅かい護では、私のお母さんが家事をしながら、わたしのお父さんのお母さん、つまり血のつながりのないおばあちゃんの面どうを見ていた。お父さんは建築の仕事で面どうを見られないときがあったり、お父さんの兄弟は岡崎市に住んでいるからなかなか来られなかったりするので、お母さんだけに負担がかかって、夜にお父さんとお母さんでけんかしていたこともあった。かい護は楽しいものではないと思うのに、それでもかい護をがんばっていたお母さんやお父さんはすごいと思ったし、かい護の仕事についている人もすごいと思った。でも、おばあちゃんのガンは良くなるどころか悪化してしまい、在宅かい護では面どうを見切れなくなってしまった。

五年生の秋くらいからかい護し設に行くことになり、コロナの関係もあって私は会うことができなくなってしまった。だから、お母さんはおばあちゃんの様子を写真にとって教えてくれるようになった。それを見て、私は
「ふーん」
としかお母さんに言っていなかったけれど、実はけっこう楽しみになっていたのかもしれない。そして、けっこう私の力になっていたのかもしれないと思った。

私が六年生になった少し後くらいに、おばあちゃんはかい護し設から病院に救急車で運ばれた。病院でみてもらい、またかい護し設にもどったが、その後また病院に行って入院することになった。私はまたおばあちゃんに会えなくなった。病院はかい護し設より面会が少ないから、一週間に一度、五分だけというものだ。短い時間だけれど、わたしたち家族にとってはとても大切なものだから、お母さんはいつも写真をとって、おばあちゃんのことを教えてくれた。でも、家にいたときは一日一リットルだった呼吸器の酸素量が、自分では呼吸ができなくなって少しずつ増えていって、私の小学校生活最後の夏休み初日には二リットルまで増えていた。そのころ、病院からお母さんに電話がかかってきて、おばあちゃんの様子がおかしいと言われて病院に行くことが二回くらいあった。その時から家族みんな感じていたのかもしれない。お母さんは
「おばあちゃんはもう長くないかも」
と言っていたけれど、家族みんなそんなことは考えられなかった。だから、みんなその先のことは考えずにいつも通り生活していた。

お母さんが言ったことは数日して起きた。私はサマースクールで学校へ行っていた。つかれたなと思いながら家に帰り、スマホを見た。すると、家族のラインでお母さんから
「おばあちゃん亡くなりました。九時四十二分です。」
と書かれていた。その時、私はなみだが出てこなかった。おばあちゃんが亡くなったなんて信じられなかったし、信じたくなかったからだ。お母さんにふだん通

りでいいよと言われていたからふだん通り過ごしたけれど、少しずつ「おばあちゃんは亡くなってしまったんだ」と感じてさみしくなっていった。その日の夜、私は暗い部屋で一人たくさん泣いた。大つぶのなみだが

「ポトン、ポトン」

とどんどんあふれ出していった。そして、おばあちゃんの笑顔と思い出がたくさんうかんだ。おばあちゃんは笑顔が似合う人だった。いっしょにいちごがりに行ったりご飯を食べたり、おばあちゃんの作ったコロッケを食べたりした。一番思い出に残っているのは、ねむたくなる本を買ってもらったのにおばあちゃんと遊びたくて、お昼ねしなくておばあちゃんを困らせたことだ。そんなたくさんの思い出が、次々とうかんできた。その夜は泣きつかれてねてしまった。

おそう式の日。私はおそう式では泣かなかった。でも、親せきの人は少し泣いていた。一番泣いていたのは私のお母さんだ。お母さんはかんおけに花を入れるとき、たくさん泣きながら「ありがとう、ありがとう」と言っていた。そして、みんなで思い出の写真と花をいっしょに入れた。

私はおばあちゃんという身近にあるひとを失った。身近にあるものはいつもあると思いがちだけれど、失って気づくこともあった。おばあちゃんを失ったということは、私の人生において、一ページだけのことかもしれない。けれど、この一ページはこくて深い大切な一ページだと思う。この出来事から学んだことは、身近にいた人を失ってしまう感情はとても悲しくてつらいことだけれど、それはその人が大切だった証こだということだ。身近な人をいつ失うかはわからない。だからその人と過ごす時間や思い出を大切にしようと思う。そうすることで後かいがないようにしていきたい。

私はまたかみの毛をのばそうと思っている。五年生の春にやったヘアードネーションをして、もう一度おばあちゃんみたいな人の力になりたいからだ。これからも、自分に出来ることにちょう戦し続けていきたい。そして、身近にいる人を大切にして毎日過ごしていこうと思う。